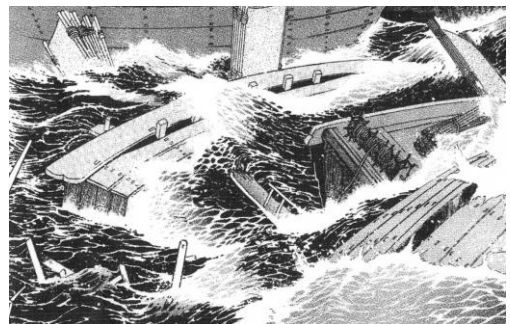
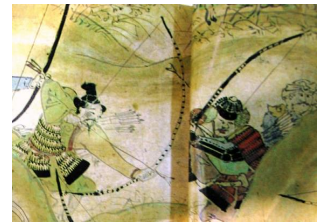


唐丹の民話・8話「片川地区」

# 夕日姫 仕える

## 法印様の かたき討ち



平成18年10月

唐丹・愛ちゃんネットパソコンクラブ

## 目 次

### —夕日姫仕える法印様のかたき討ち—

唐丹民話の再話著作にあたって	2
1. 北国きっての名族葛西氏	4
2. 白崎の館主千葉長門守	4
3. 河東法印は神主	5
4. 剣のころえに早まったか法印！	5
5. 長門守の意外なもてなし	5
6. 舞で危険をさとした朝日姫	6
7. 矢、身をつらぬき、法印無念の死！	6
8. 夕日姫、朝な夕なに願かけて	6
9. 満願成就。葛西氏・千葉一族亡びる	7
10. 追記（参考）	8

## 唐丹民話の再話著作にあたって

唐丹公民館の自主パソコンクラブ（設立：平成17年6月／名称：唐丹・愛ちゃんネットクラブ）では、パソコンによる文章作成を習得した証と民話を伝承する狙いを含めて民話の再話著作活動を実施しました。

文章作成の教材は、釜石民話の会（平成2年発足）の機関紙「釜石民話」を活用させていただきました。

この釜石民話の中から、唐丹に関り、かつ再話できるものを選び、その根底にあるものを変えないことを基本に「見やすく」、「読みやすく」、「分かりやすく」するために小見出しを付け、写真や絵図などを挿入。できるだけ、関連する歴史や実話を織り込みながら作成しました。

いつの日か、この冊子が誰かの目に留まり、唐丹にもこんな話があったのかと唐丹の「いにしえ」に想いをはせる一助になれば幸いと思います。

おわりに、この活用させていただいている民話は、釜石民話の会会員でありました唐丹町片岸の加藤ムツさんが採録（聴き取り）したものであり、第1集から第6集に掲載の民話の数は92編を数えます。

加藤ムツさんの民話を伝承したいという、この熱意と努力に敬意を表するとともに、故人となられました加藤ムツさんのご冥福をお祈り申し上げます。

なお、この物語の「夕日姫仕える法印様のかたき討ち」は、釜石民話第1集「中世の頃の唐丹の話」を再話著作したもので、その原文は次のとおりであります。

葛西氏は17代にわたり、およそ4百年も続きましたが、この話は滅びる頃のことです。葛西一族、千葉長門守が、小白浜の白崎に館を築き、伊達藩と南部藩の国境の海の守りについていたある日、本郷、小白浜を見回り桜峠にきて、馬に水をあたえようと、ひらりと馬から下りた所、馬が何かに驚いたか手綱を振り切って走り出しました。ちょうどそのとき、河東大学法印様が通りかかりました。この人はこの地方の豪族で足の裏に、大という字のあざがあったそうです。

長門守は止めてくれと叫びましたが「しとめてくれ」と聞いて、一刀のもとに切ってしまいました。さすがの法印様も困り果て、館に行きわびを申ししたところ、長門の守はもてなして、酒魚をご馳走してくれました。

やがて、御殿の女中、朝日姫が扇を持、舞いながら歌った中に「ねんねろや一、逃げたまえや逃げたまえ」と歌いました。法印様はそれを聞き、小用をたすふりをして館から逃げ、海に飛び込みおよいで鶴の鳥岩についた時、長門守

の強弓の矢が背を貫きなくなっていました。

朝日姫の妹に、夕日姫という人がいて、法印様のところで巫女として、つかえていましたが、なくなった法印様の胸中を想い、朝な夕なに神に祈りつづけました。

やがて、満願の三十五日は、春の嵐の激しい日でした。その折しも豊臣秀吉が関東小田原の北条氏を征して、豊臣秀吉に忠誠を誓った伊達政宗は兵を上げて気仙郡に攻め入りました。豊臣秀吉の位置にあった葛西氏千葉一族も軍船を出しましたが、嵐は激しく、怒涛は岩をかみ、舟は木の葉のようにゆれて砕け散り、兵は海に投げ出され、死体は砂浜に、あるいは岬に打ち上げられました。現在、死骸のあがった岬などを死骨崎、首崎と呼ばれています。

海の近くの「伝城」という小さな城の姫であった朝日姫の遺品は、明治二十九年の大津波で、ことごとく流されて、今はもうないということです。

原文は、おしまい

## 夕日姫仕える法印様のかたき討ち

### 1. 北国きっての名族葛西氏

葛西氏の始祖は清重。下総国葛飾の豪族でした。文治5年源頼朝公の家



(源頼朝奥州征伐路)

来として、奥州平泉の藤原氏を征伐のとき  
大手柄をあげ、現宮城県東北部、現岩手県  
南部などの領地をもらい、葛西七郡・30  
万石と称された中世の大名でした。

この葛西一族には、千葉氏や新沼氏もふ  
くまれています。

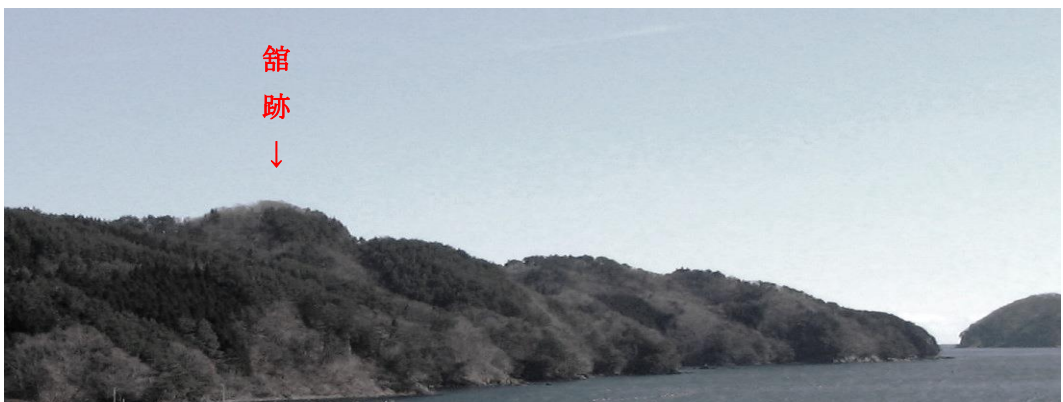
400年つづいた葛西氏17代晴信たち  
は、天正18年7月、豊臣秀吉の小田原の  
戦いに遅れをとったため秀吉の怒りにふれ  
ました。

そして、とき、天正18年8月秀吉は、  
遅れをとった大名たちを、仕置軍により攻  
め滅ぼしてしまいました。

この話は、その滅びる頃のことです。

### 2. 白崎の館主千葉長門守

葛西氏の家来千葉長門守は、小白浜の白崎に東西17間(約31m)、南北20間(約36m)の館を築き、伊達藩と南部藩の国堺や海上などを護っていました。



(館跡・小白浜方面より望む)

### 3. 河東大学法印は神主

河東大学法印は、天照御祖神社の神主で、この地方の豪族でもあり、通称「ほんげん様」といわれていました。足の裏に「大」という字のあざがあったということです。



(現天照御祖神社)

### 4. 剣のころえに早まったか法印！

ある日、長門守が本郷や小白浜を見回り、その帰り道、桜峠で馬に水をやろうと、馬からヒラリと降りました。そのとき、馬は何に驚いたのか、突然、手綱をふりきって、あばれ、走りだしてしまいました。

丁度そのとき、本郷での神事をおえて、帰り道を急ぐ法印が通りかかりました。



(あばれ馬に立向う法印)

あばれ馬に、迫りくるあばれ馬から身をおかし、一刀のもとに斬り「しとめて」しまいました。

長門守は、愕然として、馬を「とめてくれ！」といったのに、なぜ斬ったのかと怒り狂い、法印にくっかかりました。

長門守は、法印の方に向って走って行く馬を追いかけながら、その馬を「とめてくれ！」と叫びました。

法印は、あばれ狂って走ってくる馬をみて、その馬を、「しとめてくれ！」と叫んでいるように聞こえました。剣には、ころえのある

### 5. 長門守の意外なもてなし

さすがの法印も困り果て、日をおいて館に行き、長門守に「しとめて」くれと聞こえた詫びを申しました。

意外なことに、長門守は、詫びをころよさそうに受け入れ、酒や肴でもてなししてくれました。



(法印もてなしの酒宴)

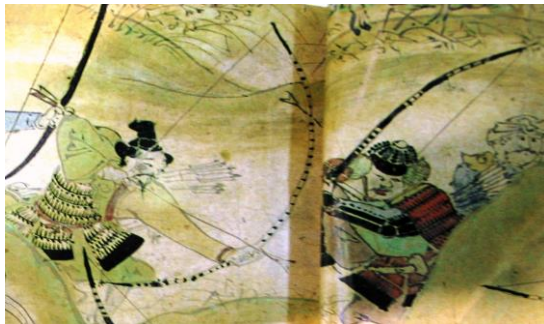
## 6. 舞で危険をさとした朝日姫

法印は、なにか裏があると感じて用心をしていました。やがて、宴もたけなわのころ、御殿女中の朝日姫が扇を持ち舞いながら「ねんねろや一、逃げたまえや逃げたまえ」と歌いました。



(舞いおどる朝日姫)

## 7. 矢、身をつらぬき、法印無念の死！



(矢を射る長門守たち)

法印は、それを聞き、やはり、なにかがあると思い、小用をたすふりをして、そのまま海岸にむかって走り、海に飛びこみ、鶴来の方に向って泳いで逃げました。

ようやく鵜鳥岩にたどりつき、ほっとした、そのとき、長門守の放った強弓の矢が肩をつらぬきました。残念ながら、それがもついで、法印は亡くなりました。



(鶴来の鵜鳥岩)

## 8. 夕日姫、朝な夕なに願かけて



(願かける夕日姫)

朝日姫に夕日姫という妹がいて、法印のところで巫女としてつかえていました。夕日姫は、亡くなった法印様の無念の胸中を想い、長門守を祈り滅ぼそうと願をかけ、朝な夕なに神に祈りました。

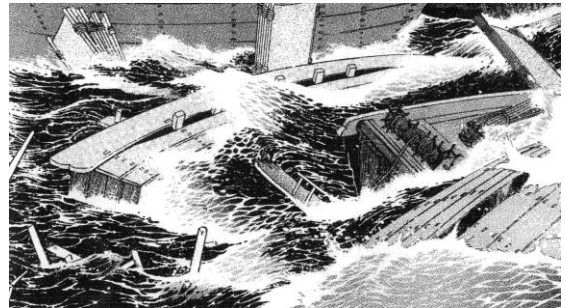
## 9. 満願成就。千葉一族亡びる



(伊達軍に応戦する葛西・千葉一族)

やがて、満願の35日は、春の嵐の激しい日でした。おりしも豊臣秀吉が関東小田原の北条氏を征伐して、豊臣秀吉に忠誠を誓った伊達政宗が兵を挙げて、小田原の陣に参戦しなかった気仙郡の大名を仕置のため攻めこんできました。

仕置にあった葛西氏千葉一族も軍船を出し応戦しましたが、嵐は激しく、怒涛は岩をかみ、船は木の葉にゆれて砕け散り、兵は海に投げだされ、死体は砂浜に、あるいは岬にうちあげられました。



(戦に敗れ沈みゆく舟)

それからは、死骸があがった岬などを死骨崎や首岬と呼ぶようになりました。



(唐丹周辺の図)

物語・おしまい



## 10. 追記 (参考)

### (1) 物語により人物が入れ替わっている

この再話は、加藤ムツさんの聴き取りの話を基本にしてあり、千葉長門守と河東大学と夕日姫との絡みにしてあります。

他方では、この事に関連した話に「千葉館の千葉長門守と伝城の木村伊勢守秀俊の争い」として、朝日姫と夕日姫の姉妹は、木村氏の娘である云々……。

あるいは、この木村氏が河東大学におきかえられ、朝日姫と夕日姫が河東大学の娘になったりする話は「釜石市誌・唐丹小史資料編」や「歴史の道」などにも掲載されています。

### (2) 呼び名多き古館

「夕日姫仕える法印様のかたき討ち」では、原文から「白崎の館」としてあります。が、多賀城・千葉館・唐丹城・白崎城とも呼ばれています。

したがって、この館の大きさは、気仙風土記等にあるものを引用しています。

### (3) 歴史書では病死

「元和年中（1615～1623）まで居住していたが、病死したと伝えられる」。等と記載されています。

10. 追記 (参考) の項、おわり

◎釜石民話・第1集：中世の頃の唐丹の話

○話 し 手：不詳

○聴 き 手：加藤ムツさん／片岸

●再話著者：狩集秀子／小白浜地区（唐丹・愛ちゃんネットパソコン）

：新沼 裕／本郷地区（唐丹・愛ちゃんネットパソコン）

●写真撮影者：新沼 裕（同上）

●校正指導者：新沼 裕（同上）

●再話完成：平成19年 3月

\*挿絵等は、ビジュアル日本の歴史＝発行所・デアゴスティーニ  
わたしたちの歴史＝国際情報社より引用